

6. 村の中の町っこー二俣の子供たち

高 屋 憲

- I はじめに
- II 医王山校下のなかの二俣
- III 子供たちのくらし
- IV 考察

I はじめに

本稿では昭和初期から現在までの二俣の子供たちの姿を、医王山小学校の児童数を手がかりに4期に分けて見ていくことにした。ここで言う子供とは6～7歳から12～13歳までの小学校に通う年齢を指す。

表-1は医王山小学校全生徒数の変化を示しているが、ここで注意したいのは、医王山小学校児童数は、小学校が統合された1898年以降は、二俣の小学生に加えて田島・荒山・奥新保・砂子坂・清水などからの小学生も含んでいることである。¹⁾よって二俣の戸数の増減と数的には直接比べるわけにはいかないが、地区の児童数の増減の割合ということに限定するとある程度の傾向を把握するための情報は得ることができる。まず第2次大戦終戦前を第1期(1945年前後まで)、比較的生徒数が安定した時期を第2期(1945年～1960年前後)、急激に生徒数が減少していった時期を第3期(1960年～1975年前後)、低いところで安定している時期を第4期(1975年～現在)とする(表-1参照)。このように4期に分けた理由は、子供の数の変化は子供たちの生活全般に影響を与えており、それぞれの時期に特徴ある子供たちの生活を見ることができるからである。

昭和に入ってから二俣総戸数は減少しているが(第1章表-1参照)それほど大きな減少ではない。それに対して医王山小学校全生徒数は1960年までは250人前後で安定していたが、それ以降は激減し、1973年にはついに100人を割り込んでしまい、その後も少しずつ減り続けている。このことから1960年以降の医王山小学校生徒数の激減は二俣から大量に人口が流出したからというわけではなく、1戸当たりの小学生の数が減少したことが大きな原

表-1 医王山小学校の児童数

年度	児童数	年度	児童数
1876(明治 9)	156	1930(昭和 5)	266
1882(" 15)	297	1935(" 10)	237
1887(" 20)	134	1940(" 15)	271
1892(" 25)	174	1945(" 20)	335
1898(" 31)*	332	1950(" 25)	236
1900(" 33)	244	1955(" 30)	262
1905(" 38)	277	1960(" 35)	237
1910(" 43)	315	1965(" 40)	161
1915(大正 4)	349	1970(" 45)	130
1920(" 9)	361	1974(" 49)	88
1925(" 14)	305	1992(平成 4)	63

資料出所 1974までは『医王』294
* 田島小、荒山小を統合

因であることがわかる。このような傾向は二俣だけの現象ではないが、これを差し引いても1960年代以降の生徒数の減少は著しい。そのことには出生率の低下だけではなく、二俣に高齢化が進んだことも影響していると言えよう。

Ⅱ 医王山校下のなかの二俣

医王山校下は二俣の他に田島・清水・荒山・奥新保・砂子坂の五ヶ町を含んでいる。二俣はこれら医王山校下の他の町と比べ、戸数は圧倒的に多く、医王山小・中学校は集落に隣接し、警察の駐在所や郵便局も集落内に置かれている。さらに本泉寺・静光寺の2つの寺、保育園や農協もある。これらのことから二俣は、医王山校下における教育・文化の中心地と言える。現在60代の二俣の男性が「二俣はお店や郵便局があったことで医王山校下のなかでは文化の中心地であり、他の町より進んでいた」と話してくれた。このような「二俣は医王山校下の中心」という優越感が特に第2次大戦前には強かったが、戦後から次第に薄れていき、現在はそれほど大人の間では感じられない。

子供たちの間にも、子供の数が比較的多かった第2期まではそのような優越感はあった。そして、医王山校下では二俣の次に戸数が多い田島の子供たちは二俣の子供たちに対して対抗意識を持っていた。この対抗意識は主に遊びの中に見られ、二俣対田島の兵隊ごっこという陣取りのような遊びが第1期までは時々行われており、戦後も第2期は行われていたが、それ以降はなくなっている。これは、子供の数が少なくなり兵隊ごっこのできる人数に足りなくなったこと、そして二俣の子供たちだけで遊ぶことが難しくなり田島の子供たちとも遊ぶようになったためである。

田島は二俣から比較的近距离にあるが、特に荒山・奥新保・砂子坂はかなり遠く、この3集落の子供たちは、車が普及していなかった時代は歩いて医王山小学校まで通っていた。荒山にあった分校がなくなってからは片道5キロ以上の山道を歩いて通っていた生徒もいたという。このように遠くの集落から通っていた生徒のために、雪が積って通学が困難になる冬季のための寄宿舎が1970年代始めに設置された。しかし除雪技術の発達で車で通うことも容易になったことや、二俣や田島以外から通ってくる生徒もごくわずかになったため、1988年から寄宿舎は使われていないが、この建物は今でも医王山小学校のグラウンドの隅に見ることができる。

Ⅲ 子供たちのくらし

ここでは「地域の中の子供たち」、「子供たちの手伝い」、「子供たちの遊び」の3つの項目を通して子供たちのくらしを見る。また、それぞれの項目では第1期～第4期に分けて記述する。

1. 地域の中の子供たち

日曜学校や子供会の活動など子供に関係する活動を見ていくが、第1期と第2期とはあまり違いがないので区別しないで述べる。

(1) 第1期・第2期（～1960年）

昭和初期では少年赤十字活動がある。これは奉仕活動を中心とした子供会のようなものだった。白山神社や本泉寺、墓地、道などの二俣内の掃除を年数回することが主な活動内容であった。少年赤十字としての奉仕活動は第2次大戦前にしか見られないが、その後も奉仕活動だけは残った。また、町単位で行われていた他の奉仕活動としては夜回りがあった。これは二俣で起こった大火事がきっかけとなって1930年代後半に結成されたものである。この仕事は子供たちの自主性に任せられており、大人は夜回りにあまり関わっていなかった。「仕事とか義務という意識があってもあまり楽しいという感じではなかった」（67歳男性）というように、夜回りがされ始めた頃は子供たちも楽しんで夜回りをしていなかった。しかし1950年後半ごろからは、それまで仕事という意識が強かった夜回りを子供たちが楽しむようになった。「拍子木たたいて大声で歌いながら回っていた」（47歳女性）という話からは楽しんで夜回りをしている子供たちの様子がうかがえる。

(2) 第3期（1960年～1975年）

この時期で最も注目すべきことは1960年代初めに日曜学校が開設されたことである。日曜学校は本泉寺が主催で、住職が主に世話をしている。その主な内容は、お経を暗唱したり住職が法話をしたりすることだった。またこのような宗教に関係するだけでなく歌もうたったりダンスもしたり笑い話をしたりしていた。全体の4分の3以上の子供が出席しており、日曜学校はこの時期の子供たちにとって大きな楽しみだった。この当時日曜学校に通っていた現在30代の女性は「日曜日に通う、勉強がなく楽しい学校」と言っている。このように子供たちにとっては日曜学校自体の内容が楽しかっただけではなく、早めに行って学校が始まる前にトランプなどをしたり、終わってもそのまま残って遊んでいることも楽しみだった。出席は強制されていたわけではないが毎回出席をとり、出席が優秀な子供には『白象賞』という皆勤賞のような賞として、なべしきなど生活用品がもらえた。また、小学校の高学年になると泊まりがけで旅行をしていた。1970年代後半には夏に3泊4日で京都に行ったという。子供たちが泊まった東本願寺の隣の宿舎では、子供たちが髪の毛を剃って出家するまねごとをして法名をもらうという『かみそり式』という儀式があった。このように日曜学校にはほとんどの子供が出席し、さらに数日宿泊する修学旅行のような旅行があった。この時期の子供たちにとって日曜学校は、小学校と変わらないくらいの重要な存在だった。

第2期まで見られていた夜回りは、この時期の初めにはなくなっている。しかし二俣内の掃除をするという奉仕活動は時々行われていた。

(3) 第4期（1975～）

現在でも日曜学校は存在しており、毎週日曜の朝、お経を唱えたり法話を聞いたりするだけでなくいろいろなことをするというスタイルは今でもあまり変わっていない。調査中日曜学校を見学した時には、「一番大事なことは何か」ということが住職と子供たちの間で話題

になっていた。二俣の小学生の約半分が出席しており出席率はそれほど悪くはない。

日曜学校の他に子供たちが参加するものには子供会や公民館の活動がある。子供会は第3期の終わりごろにもあったが、特に第4期からその活動が活発になってきている。1991年度の活動では、校下ちょうちん行列やホタル生息調査などバラエティーに富んだ内容となっている。²⁾また、文化祭では父親が子供に紙でっぽうや竹とんぼの作り方を教えるという場面が見られた。これは自然と交わる機会が比較的少ない現代の子供たちに自然への興味を起こさせるという目的があるものと考えられる。これも親子交流の一環だと思われるが、親子つり大会や親子バーベキュー大会など『親子』とついた行事が多い。このことは、二俣では金沢に職場を持っている父親も多く、普段子供と交わる機会の少ない親のために設けられた行事であると考えられる。農業や紙漉きやその他副業をするだけで生計を立てている家は第4期では少なく、休日以外に子供と接する時間を父親たちはあまりもてなくなっている。

町単位で行われている子供たちの仕事としては、地藏様そうじ・献花という行事がある他には目立ったものは見当たらない。

2. 子供たちの手伝い

「地域の中の子供たち」ですでに町単位で行われる子供の仕事を述べた。ここでは家庭のなかの子供たちの手伝いを見ていく。

(1) 第1期

紙漉きや農業をしていた家庭では、子供たちが貴重な働き手とされていた場合が多い。紙漉きで生計を立てていた家庭では、ほとんどの子供たち、特に女の子は紙漉きの作業そのものやその下仕事を手伝っていた。大正時代には小学校を卒業したら中学校に入らずにすぐ紙漉きを始めるという女の子も珍しくはなかった。農家では田をくわで起こしたり、稲を刈ったりなどの作業を子供たちは手伝っていた。さらにわら細工品を作るなどの農家の副業においても子供たちは重要な働き手だった。紙漉きや農業、そしてその副業の手伝いは子供たちにとって体力的にも相当厳しいものだった。また、時間的にも大きな割合を占めていた。「手伝うのがいやで学校から帰ったらすぐ家の裏口から抜け出て、こっそりと遊びに行った」(67歳男性)という話は、手伝うよりも遊びたい子供の心境を物語っている。しかし一方では自分の仕事が家計に結構大きな部分を占めていることを知っている子供もいて、「つらいけれど手伝いはしなければならない」(67歳男性)という義務感さえ感じていた。

子供たちは、仕事を手伝ったからといってその代わりにおこずかいをもらうことはなかった。この時期、おこずかいをもらっていた子供はほとんどいない。しかし例外としてお正月やお盆など特別な時には、おこずかいをもらうことができたようであった。さらに蓮如忌などで二俣外から来た人で町が賑わった時には、山や野原から花を摘んできてそれを売って少額ながら金を稼いでいた子供がいた。この時期の子供たちにとっては家の仕事を手伝ったか

らといってもそれは当然のことであり、たまにおこずかいをもらうことは相当うれしいことだった。

(2) 第2期

1950年代に入ると子供たちの手伝いに大きな変化があった。二俣における紙漉きの衰退、農業では農業離れや兼業化による規模縮小、さらには機械化によって働き手としての子供たちの負担は減っていく。こうして仕事が楽になる従って農作業などを手伝うことを楽しみにする子供がでてきた。「小学生の時、友だちと一緒に田んぼの仕事を手伝うのが好きだった。そして昼休みに大人に混ざってお茶を飲みながら話をするのも好きだった」(46歳女性)という話からは手伝うことに対するつらさはあまり感じられない。また、このように大人と一緒に仕事することは大人との良い交流の機会だった。

紙漉きや農作業の手伝いが減っていくのと同時に、以前からされていた簡単で時間もあまりかからない手伝い、例えば自分より小さい子供の面倒を見たり、山に行って燃料にするためのたきぎを拾ったりすることが子供の主な手伝いになった。子守は結構大変だったが、たきぎ拾いは子供同士数人で山へ行って、仕事というより遊びという感覚で楽しんでいた。

(3) 第3期

第2期が仕事が以前よりつらくなくなり子供たちにとってそれがうれしかった時期とすれば、第3期は楽なことが当然となった時期だと考えられる。さらに第2期以前では楽だとされていた仕事でも子供たちは負担を感じるようになった。簡単な農作業の手伝いでも「親が言うからいやいや」(35歳男性)やるようになる。また1960年代からの急激な子供の数の減少によって、子守にかかる手間は少なくなり、大人たちにとっても子供たちにとっても子守はあまり負担のないようになっていく。仕事が楽なのに子供たちが負担を感じるようになったのは、楽な手伝いが第3期では当然だったからである。言い換えると、第2期ではつらい手伝いは普通だったので、時々楽な仕事だけの時は子供たちは非常にうれしかったが、第3期は楽な仕事が普通だったので、子供たちは特別そのことをうれしいと思うことはなかった。

(4) 第4期

1970年代後半から現在にかけて子供たちの主な家庭での手伝いは、家の中の簡単な掃除などである。体力的にも時間的にも子供たちの負担になっていないが、大部分の子供はこのような仕事をいやがっている。これは二俣の子供たちだけに限ったことではないだろう。

3. 子供たちの遊び

(1) 第1期

この時期には親たちが子供たちにおもちゃなどを買い与えるということはまずなかったの
で、子供たちにとってはどのようにして子供同士で遊ぶか、さらにはどのようにして自然を利用するかが重要だった。しかし子供同士とはいっても男女と一緒に遊ぶことはほとんどな

く、男女間では遊び方や遊び道具、遊び場のそれぞれに違いがあった。

男の子はしばしば兵隊ごっこやオリシキ（陣取り）をして遊んでいた。どちらも相手の陣を攻め合うという遊びだが、兵隊ごっこの方が激しく戦闘的で木の棒などの武器が使われることもあった。兵隊ごっこは二俣対田島とかの対抗戦形式で遊ばれていた。また二俣内でも上出対下出というように遊ばれることがあった。二俣対田島ならそれぞれの町、上出対下出ならそれぞれ医王山神社と白山神社に陣取ることが多く、広く土地を使って遊んでいた。しかしこのような対抗戦は年に数回しかなく、ほとんどは仲間同士で楽しんでオリシキをすることの方が多かった。

また、男の子は山や川など自然の中で遊ぶことにたけており、遊び方は親や年上の子供から教えてもらったり、自分で考えだすこともあった。自然の産物を利用して子供たちが作っていた道具は多く、竹細工の笛や弓矢、杉の木からつくるボケゴマいう駒などがあった。子供たちは山ではくりを拾ったり、山菜を採ったりしていた。さらに、食べることでできるものならなんでも食べようということで、つつじの花を食べたり、ゆりの花が咲けばその蜜を吸ったりして自然からおやつを得ることがあった。川では泳いだり、現在に比べると川は非常にきれいで多くの魚が住んでいたのも、いろいろな形のわなを仕掛けて魚をとって遊ぶことは多かった。わなの作り方などは年上の子供から教えてもらったり、見よう見まねで習得していった。このように、上級生でも近所であれば一緒に遊び、近所同士の子供たちで遊びのグループがつくられていた。

女の子も近所同士で遊びのグループが形成されていた。オリシキをしたり、山や川で遊ぶ女の子もいたが、大体は近所の路上や広場で遊ぶことがほとんどだった。しかし、その中でも女の子がよく集まってきたのは本泉寺だった。ちょうどいい広さの広場があるからで、そこでお手まりやおじゃめ（お手玉）をして遊んでいた。このお手まりやお手玉は子供たちの手作りのものが多く、お手まりはぜんまいの綿を使って作られていた。また、お手まりやお手玉などをして遊ぶ時にはいろいろな歌をうたいながら遊んでいた。（以下『梅干しの歌』）

二月三月花盛り うぐいす鳴いた春の日の

楽しい時は夢のうち

五月六月実がなれば 枝からふるい落とされて

近所の町へ持ち出され 何升何合はかり売り

塩につかって辛くなり しそに染まって赤くなり

七月八月暑いころ 三日三晩の道路干し

思えばつらいことばかり それも世のため人のため

しわが寄っても若い気で 小さい君らの仲間入り

運動会にもついてゆく ましていくさのその時は

なくてはならぬこの私

(2) 第2期

1948年に二俣一金沢間のバスが開通した。バス開通以前は金沢との往来は仕事に関係したこと以外ではめったになく、バスが通ったことで金沢へは容易に行くことができるようになった。だからといって子供たちの金沢へ行く回数が急に増えたわけではなく、バスが通ってからも年に数回ぐらいしか金沢には行っていない。

子供たちの遊びは第1期とあまり変わっていない。ただ戦闘的な兵隊ごっこはなくなって、その代わりに以前にもあった他の遊びや新しい遊びがされてくるなど、全体として遊びの種類が増えた。例えば、路上に石を並べてはさみ将棋のように遊ぶ16コマ、川で石を投げて遊ぶケンパタラなどがある。魚の獲り方も発展しており、川の中をのぞくガラス箱などさまざまな道具が使われている。

(3) 第3期

この時期あたりから子供たちは男女一緒に遊ぶようになってきた。そして男女の遊びに以前ほどの違いはなくなっている。男女でも遊ぶようになった理由としては、子供の数が少なくなったことによって遊び相手を選べなくなったということが考えられる。また、1960年ごろから二俣にテレビが入りだしたが、テレビはまだあまり普及してなかったので今ほど子供の生活への影響はなかった。おこずかいが与えられるようになったのもこの頃からで、二俣の商店にも子供たちは時々行くようになった。金沢にも親子で遊びに行くようになり、おもちゃも買い与えられた。

このような周囲の環境の変化の中でも子供たちは主に自然を相手にして遊んでいた。遊び方にはさらに工夫がされて、これまでもあった遊びがさらに発展している。源氏と平家の旗をそれぞれの陣に立て、その旗の取り合いをする旗源平という陣取りを発展させたような遊びや、ゴロベースという本泉寺の境内や広場でよくされていた遊びは男女一緒に遊ばれることがあった。それでも小学校高学年になるとお互いに異性ということを意識するようになって一緒に遊ぶことは少なくなっている。

栗などを拾いながら遊ぶという山での遊びは変わらない。しかし川は次第に汚染されてきて、川原にガラスのかけらなど危険な物が落ちているようになった。そのため、以前より川で泳いだり水遊びをする子供が少なくなった。しかし魚釣りはほとんどの子供たちがしていて、魚が棲まなくなるほどには川はまだ汚染されてはいなかった。

(4) 第4期

この時期までにはテレビはほとんどの家に普及していた。また、交通事情も良くなり金沢との往来が不便でなくなった。現在では多くて週1回、少なくとも月1回は親子で金沢へ出かけている。そして、勉強や習い事に割く時間が増えるなど、二俣の子供たちを取りまく環境が大きく変わった。

第3期以前に見られていたような、自分の手作りの道具で遊ぶ子供は一部にしか見られなくなりました。さらに川で泳ぐことや川原に降りることは危険であるということで小学校低学年は学校の規則や親からの注意で子供たちだけで川原に降りることはできなくなりました。また、陣取りなど以前見られたような遊びはされなくなり、外での遊びはドッジボールなどの球技がほとんどである。また、1学年に10人も生徒がいない現在では、³⁾田島の子供たちと遊ぶことや、男女一緒に遊ぶこと、また学年は関係なしに遊ぶことは普通になっている。

テレビや家の中での遊び（ファミコンなど）、さらに勉強などで家の中で過ごす時間が大きく増えた。しかし、確かに外で遊ぶ時間は減ったが、多くの子供たちは毎日のように外で遊んでいる。川は汚れたがそれでもまだわずかに魚は住んでおり、よく子供たちは魚釣りをしている。

IV 考 察

昭和初期から現在にかけて、子供たちの暮らしに大きな影響を及ぼしたのは子供の数の減少である。子供たちの生活のあらゆる面にこのことは影響を及ぼしている。例えば遊びの変化である。大人数でするような遊びから、ファミコンのように1人でもできるような少人数の遊びへと移り変わることを子供の数の減少は余儀なくさせた。近所の子供たちだけで遊ぶことはなくなって田島の子供たちと遊ぶことは当然のこととなり、対抗意識を持つことはなくなってしまった。

また、テレビの普及や交通の発達も大いに子供たちの暮らしを変化させてきたといえる。テレビからの情報は二俣でも都会でも同じであり、そのことが両者の興味の対象を同じくさせている。交通の発達は金沢に30分以内で行くことを可能にした。休日には親子で金沢へ行くことを多く、二俣の子供たちは都会の子供たちと変わらない情報を得ていると考えられる。子供たちの興味が他の子供たちと変わりがなく、さらにその興味を満たしてくれる場所にも車に使えば容易に行けるのだから、二俣の子供たちが都会の子供たちと生活や考え方などあらゆる面において均質になっているのは当然のことである。

「最近の子供たちは子供らしさが全くない」と大人たちが言うのをしばしば耳にする。果たして現代の子供たちは本当に「子供らしく」ないのだろうか。そして「子供らしさ」とは一体何だろう。「子供らしさ」とは大人が勝手に子供に押しつけたものであり、現代の子供も事実、現代風に「子供らしい」のである。言い換えれば、「子供らしさ」とはそれぞれの時代の子供を象徴した姿であるから、どの時代でも現在でも「子供らしさ」は存在する。そこでどうして冒頭に述べたようなギャップが起きるのかと言うと、大人たちは自分が子供だった頃の「子供らしさ」を現代の子供たちにも当てはめようとするからである。このようなギャップは二俣においても確かに存在しているが、独自の「子供らしさ」を二俣の子供たちは持っていた。二俣の子供たちはファ

ミコンもするし勉強もする。

しかしそのような中でも、都会の子供たちと区別できるような「二俣らしい」子供たちがまだ大勢いる。子供が遊べるような自然が二俣には存在しており、その中で現実に子供たちは遊んでいるのである。このことは、ファミコンなど新しい興味の対象が登場した現在においても、自然は十分に子供たちの興味の対象になり得るということを示しているのではないだろうか。他にすることがなく暇だからという理由でもいいし、気分転換をしたかったからという理由でもいい。理由は何であれ二俣の子供たちは自然の中で過ごすという都会の子供たちとは違うことをしているのである。家の中でファミコンや勉強もするが、外でも元気に遊ぶ。これが現在の二俣の子供たちの「子供らしさ」であり、自然ともっと接して欲しいという二俣の大人たちからみると物足りないかもしれない。一方で、これは二俣以外でも言えることだが、親たちは子供たちにもっと勉強していい学校に入って欲しいと願う。このような状況や二俣の子供たちをとりまく環境が一変したという事情を考慮に入れると、二俣の子供たちは、これ以上できないほど大人の考えに近い「子供らしさ」を実現しているのではないだろうか。

注

- 1) 1992年度の医王山小学校には、二俣・田島以外に住む者は在籍していない。医王山中学校には清水からの生徒が1人在籍している。
- 2) その他にスキー大会やつり大会、いわな放流などの行事がある。
- 3) 1992年度では、第4学年の14人、第5学年の11人以外は、生徒数が10人以下である。